

## 米国における共通コア州スタンダードの幼稚園段階の検討

著者	新谷 龍太郎
雑誌名	保育研究
号	49
ページ	2-10
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1475/00002377/">http://id.nii.ac.jp/1475/00002377/</a>

# 米国における共通コア州スタンダーズの幼稚園段階の検討

## A study of the kindergarten Common Core State Standards in the United States

新谷龍太郎\*<sup>1</sup>

Ryutarou Shintani

本稿では、米国で進められる幼稚園から高校卒業までの一貫したカリキュラム改革の幼稚園段階に着目し、幼稚園段階の算数や ELA（言語技術）としてどのような内容が示されているのかを検討した。その結果、算数では幼稚園段階でも簡単な足し算の数式に触れることが推奨されている点や、図形認識について早くから教育していく姿勢が見られた。ELA では、「励ましと支援を受けながら」小学校 1 年生での「読み」の準備を行ったり、好きな作家の本を複数読むプロジェクトに参加して書くことなどが推奨されていた。また、ニューヨーク市でのフィールドワークからは、カリキュラム改革に際し、「遊び」とのバランスが重要であることを指摘した。

キーワード：共通コア州スタンダーズ ニューヨーク州幼児学習ガイドライン

### 1. 問題関心

米国では、国際的な経済競争の中で勝ち抜くための人材養成を視野に入れ、全米州知事会と全米州教育長協議会により 2010 年に共通コア州スタンダーズ（Common Core State Standards、文中では引用元に合わせ、一部「コモンコア」と表記）の最終版が発表され、各州が受け入れを始めた。本稿は、特に幼稚園段階に着目してその内容を検討する。最後に、ニューヨーク市を事例として幼小接続期のカリキュラム開発における課題について若干の考察を加え、幼稚園教育要領及び学習指導要領の改訂を迎えた日本における示唆を導きたい。日本の幼稚園段階に相当する米国の学校段階は、就学前教育（preschool）、もしくは幼児教育（Early childhood education）であり、平成 29 年度に告示された幼稚園教育要領の影響と比較するのであれば、就学前教育の段階での影響と比較する必要がある。また、入園・入学時期が異なることから、日本の小学校入学時のカリキュラムと米国の幼稚園段階

の内容を重ねて理解する必要も生じる。ただし、日本でも幼小連携の必要性が訴えられ、学校教育法でも最初の学校として幼稚園が位置づくなど、その連続性が検討されており、平成 29 年改訂の幼稚園教育要領と学習指導要領は、「目指すべき 10 の姿」としてその接続が図られている。そこで、幼稚園と小学校の接続期としてどのようなことを考える必要があるのか、また幼稚園から高校までの一貫した教育体系の始まりとしてどのようなスタートラインを設定するのかを検討する上で、幼稚園から高校卒業まで（K-12）の一貫したカリキュラムを構築しようとする共通コア州スタンダーズを検討する意義は大きい。なお、共通コア州スタンダーズでは、算数及び ELA（言語技術）は K-5 と 6-12 で大きく二分されており、本稿では K-5 を中心として検討する。

共通コア州スタンダーズについては議論が分かるところであり、特に伝統的な教科枠組みでなく、遊びを通じた子どもの総合的発達を重視する幼児教育では立場の違いがより鮮明に分かれる<sup>1)</sup>。幼稚園段階での導入に懐疑的な意見としては、「現

\*1 平安女学院大学短期大学部保育科 助教

在の早期教育に関するコモンコアを支持する調査結果の不足」「コモンコアをうまく導入できないことは、貧困層の子どもの発達に悪影響を及ぼす」などが挙げられる（2014年5月2日ワシントンポスト<sup>2)</sup>）。一方で、共通コア州スタンダーズの幼稚園段階から2年生までの算数の内容は長期的に見るとメリットがあるというものや（Otalora2016）、幼稚園段階で読めるようになった子どもは高校でも優れた読み手になっていたという反論<sup>3)</sup>もあり、今だ評価は定まっていない。

全米乳幼児協会（National Association for the Education of Young Children）は、共通コア州スタンダーズが様々な批判を受けながらも、多くの州が受け入れていることは事実であり、現場に役立つように実施するにはどうすればよいかに焦点を当てるといふ立場に立っている<sup>4)</sup>。

日本でも同様に、年長時後半から小学校へ接続するためのアプローチ・カリキュラムとして、主に生活面での検討がなされることが多いが、今後は幼稚園教育での「領域」と小学校教育での「教科」をどのように接続していくのかについて検討する必要もある。そこで、共通コア州スタンダーズの幼稚園段階の内容についてみていきたい。

## 2. 幼稚園段階の内容

### 2.1. 算数

幼稚園段階では、主として①最初は具体的な物を使って、自然数で表し比較すること、②形や空間を描くこと、に焦点が当てられる。①では、物の数を数えるなど、数字を使って量を表したり問題を解く、集めたり分けたりする状況を考えることから簡単な足し算や引き算の式を作っていくことが想定されている。

幼稚園段階でも、 $5+2=7$  などの式に触れるべきだとされ、必ずしななければいけないわけではないが、実際に式を書くことが奨励されている。②については、形や方向などの幾何学の概念や言葉を使って現実世界を表現することが想定されており、四角形や三角形、円や長方形、六角形などの基本的な二次元の形や、立方体、円錐、円柱や球など

の三次元の形がわかり描けることとされる。

領域は「数えることと個数」「演算と代数的思考」「10進法の数と演算」「測定とデータ」「幾何（図形）」の5つであり、これに「数学演習」が加わる。各領域にはいくつかの下位領域があり、それぞれの下位領域に対して複数の基準が設定されている。基準には、それぞれの領域の頭文字を反映した略語と番号が付されている。例えば、「数えることと個数」（Counting & Cardinality）の1番目の基準であれば、「CC.1:100 まで数を 1、10 ずつ数える」と表現される。各郡で作成されるペーシングガイドや市販される参考書、教室に掲示される「めあて」では、「CC.1」と、略語と番号が参照される。領域ごとの内容をまとめたのが以下の表である。

表 1 共通コア州スタンダーズ算数の幼稚園段階の領域の基準（算数）

領域	下位領域	基準の数
数えることと個数	<ul style="list-style-type: none"> <li>数の名前を知り、連続して数える</li> <li>ものの数を数える</li> <li>数を比べる</li> </ul>	7
演算と代数的思考	<ul style="list-style-type: none"> <li>ものを集めたり加えるといった加算について理解する。ものを分けたり戻すといった引き算について理解する。</li> </ul>	5
10進法の数と演算	<ul style="list-style-type: none"> <li>11 から 19 までの数を使って位取りの下準備をする</li> </ul>	1
測定とデータ	<ul style="list-style-type: none"> <li>測定できる属性を書いたり比べる</li> <li>ものを分類し、各種類ごとに数える</li> </ul>	3
幾何	<ul style="list-style-type: none"> <li>形を見分けたり描いたりする</li> <li>形を分析、比較、作成、作図する</li> </ul>	6

共通コア州スタンダーズの HP を参照し筆者作成 (<http://www.corestandards.org>)

※「数学演習」は「1.問題を理解し忍耐強く解

く」 「2.概念的及び量的な理由付け」などの8つ基準があり、すべての領域・学年に適用される(新谷 2014)。表では割愛した。

「数えることと個数」では、「0=ない」を含めて 20 までの数を書いたり、ものの数にあった数字を見つけること、書かれた 1~10 までの 2 つの数字を比べることなどが基準とされる。なお、日本の学習指導要領解説のように、細かな内容まで提示されているわけではない。この領域は幼稚園段階のみで設定されている。

「演算と代数的思考」では、ものや図形、スケッチ、手拍子などの音などにより、たし算やひき算を説明したり、足して 10 になるペアをつくることが基準とされる。「10 進法の数と演算」では、11~19 までの数字が、10 のかたまりと、1~9 の数字が合わさって構成されていると理解できること、「測定とデータ」では、一つのものに対して長さや重さなどの測定可能な属性を記述したり、2 人の子どもの身長を直接比較し、共通の属性をもとに比較するかを調べる。日本の幼稚園段階とは、学校段階の位置づけや年度始まりの時期が異なるため単純に比較できないが、代数的思考が意識的に教えられている点の特徴である。

表 2 共通コア州スタンダード算数の基準の数 (K-5 算数)

領域/学年	K	1	2	3	4	5
数え方と個数	7	0	0	0	0	0
演算と代数的思考	5	6	4	9	5	3
10 進法の数と演算	1	1	6	9	3	6
分数の数と演算	0	0	0	3	7	7
測定とデータ	3	4	10	8	5	5
幾何	6	3	3	2	3	4

また、上記の表で分かるように、K-5 の中で、最も項目数が多いのが「幾何(図形)」であり、幼稚園段階で丁寧に理解してほしいという意図がうかがえる。図形の向きや大きさに関わらず、図形の名前を正しく言うことや、長方形を 2 つの三角形で描くなど、単純な形を組み合わせて大きな形を作ることが示されている。

## 2.2. ELA

ELA (English Language Arts 言語技術) は、大きく「読む」「書く」「話す・聞く」「言語」に分けられる。

「読む」では文学と説明文のそれぞれについて、「鍵となる考えと詳細」「技法と構成」「知識と考えの統合」「読みの範囲とテキストの複雑さのレベル」の 4 カテゴリーで 10 の基準が設定された。また、K-5 では基本的な読解スキルとして、「印刷概念」「音韻の意識」「フォニックスと単語の認識」「流暢さ」の 4 カテゴリーで計 4 つの基準が設定された。

「書く」では「テキストのタイプと目的」「文書の制作と配布」「知識を構築して提示するための研究」「範囲」の 4 カテゴリーで計 10 の基準が設定された。「話す・聞く」では「理解と協働」「知識や考えの発表」の 2 カテゴリーで計 6 つの基準が、「言葉」では「標準的な英語の慣例」「言葉の知識」「語彙の獲得と使用」の 3 カテゴリーで計 6 つの基準が設定された(新谷 2014)。

ELA では知識を構築していくことも視野に含まれており、自分で必要な本を読み文章に反映していくことが期待されるが、幼稚園段階から 2 年生までは大人との豊かでよく考えられた会話に参加すべきであり、テキストを音読したり、比べたことを話したりする中で、より複雑なテキストを読む準備がなされる。

### 【読む】

幼稚園段階の基準についてみると、文学の読解については、「励ましと支援を受けながら」という前置きと共に、「鍵となる考えと詳細」ではテキストの鍵となる細部の描写について尋ねたり答える

こと、鍵となる細部の描写を含めて似たような話を語り直すこと、登場人物や場面、話の中の中心的な出来事がわかることが挙げられる。

「技法と構成」では、テキストの中の知らない単語について答えたり、おとぎ話や詩といったテキストの類型がわかること、著者と挿絵作家の名前が言え、各々が話しを物語る上でどのような役割をはたしているかがわかることが挙げられる。テキストの類型や著者の名前を幼稚園段階で伝えていくという点など、「技法と構成」について日本と比べると強調されている感がある。「知識と考えの統合」では、挿絵と話の関係について説明したり、似ている話で登場人物の冒険や経験を比べたり対比する。

説明文の読解についても、「励ましと支援を受けながら」という前置きが多く項目で見られることが特徴的である。「鍵となる考えと詳細」では、テキストの鍵となる細部の描写について尋ねたり答えること、主題がわかりテキストの中心となる細部の描写を言い換えること、テキストの中の二つまたは二人の人物や出来事、考え、情報の関係を記述することが挙げられる。

「技法と構成」では、テキストの中の未知の単語について尋ねたり答えること、本の表紙や裏表紙、タイトルページを見分けること、著者と挿絵作者の名前が言え、テキスト内の考えや情報を示す上で各々がどのような役割を果たすかわかること、が挙げられる。「知識と考えの統合」では、挿絵とテキストの関係を説明したり、テキスト内の筆者の主張や根拠を見つかったり、同じトピックについての二つのテキストの基本的な類似点や違いがわかる、とある。

文学及び説明文の読解いずれも、「読みの範囲とテキストの複雑さのレベル」では、グループでの読みの活動に積極的に参加することが示されている。付記 A を参照すると、テキストの難易度を測る指標としてしばしば用いられる Lexile レベルが紹介されており、幼稚園段階では参照されないが、2-3 年生では 450 から 790 のスコアなど一定の目安が示されている。幼稚園段階で推奨されているテキストを見ると、文学では動物の親子たちの会

話がリズムカルな数え歌になっている『おおきなのはら』や、絵だけでストーリーが進む『しょうねんと いぬと かえると ともだち』、アフリカ民話とのつながりもある『おはなしおはなし』などが紹介されている。

『おはなしおはなし』を例に取れば、テキストの複雑さを測る Lexile レベルでは 5-7 歳が推奨年齢とされ、子どもが自分で読むよりは大人が読んであげるテキストとされる<sup>5)</sup>。ただし、アフリカの原色系の絵柄や、見開きで 16 頁に及ぶ話は、日本の幼稚園でしばしば読まれる『ぐりとぐら』などに比べると複雑であり、日本人の小学 3 年生でも難しいと感じられる可能性がある。また、説明文では『わたしの五感』のように、子どもたちの身体感覚に訴えるものや、様々な動物の鼻や耳の機能を紹介する『こんなしっぽでなにをするの』、『標識を読む』のように社会生活に必要な知識を伝えるものが紹介されている。

表 3 基準 10：テキストの複雑さ・質・範囲 (ELA 幼稚園段階)

文学：物語・ドラマ・詩	説明文：ノンフィクション、歴史・科学・技術
ジョン・ラングフスタフ『おおきなのはら』(1800)	アリキ『わたしの五感』(1962)
マーサー・メイヤー『しょうねんと いぬと かえるとともだち』(1967)	ドナルド・クルーズ『トラック』(1980)
ゲイル・ヘイリー『おはなしおはなし』(1970)	タナ・ホーバン『標識をよむ』(1987)
トミー・デ・パオラ『朝食にパンケーキ』(1978)	スティーブ・ジェンキンス ロビン・ページ『こんなしっぽでなにをするの』(2003)
ケビン・ヘイクス『まんまるおつきさまをおいかけて』(2004)	サラ・トンプソン『驚きのくじら』(2005)

共通コア州スタンダーズの HP を参照し筆者作成 (<http://www.corestandards.org/>)

邦題は訳本を参照したが、発行年は原文のまま

とした

基本的な読解スキルは、印刷されたものやアルファベットの原則、その他の基本的な決まりごとについての知識についての理解が示されている。

「印刷概念」では印刷の基本的な特徴について理解を示すことが求められ、言葉を左から右、上から下、ページごとに読むことや、話し言葉は文字の並びによって書かれた文字で表されること、空白によって言葉は分かれること、大文字と小文字のアルファベットを理解することなどが示されている。「音韻の意識」では話し言葉や音節、音(素)の理解を示すことが求められ、同じ音を持つ言葉が分かたり言えること、話し言葉の中で音節を数えたり発音することなどが挙げられる。

「フォニックスと単語の認識」では、一つの文字に一つの対応する音があることについての基本的な知識や、the や of など目にしただけで理解しなくてはいけない重要単語などについて、学年に応じた分析スキルを知り応用することが求められる。「流暢さ」では、目的と理解を伴ってテキストを読むことが求められる。

### 【書く】

幼稚園段階について、「テキストのタイプと目的」では、ある話題や本について絵を描くことや口述することと合わせて意見を書いていくことが求められている(例「私の好きな本は、」)。テキストのタイプが説明的なものである場合はその情報を、ある出来事を物語る場合は起こった順番に沿って物語る事が基準となる。

「文書の制作と配布」では、大人の指導や支援を得ながら質問に答えたり、友だちからの助言を得て必要なことを書き足すこと、様々なデジタル機器を試し、友だちと協力して文書を作り発行することが求められる。適切なやり方や目的をもとに作り上げることは3年生以上の基準とされていることから、幼稚園段階では書く事を楽しむことが重視されていると見ることができる。文書の発行が基準に含められていることについては、米国で取り組まれてきたライティング・ワークショップ

プの影響も垣間見える。

「知識を構築して提示するための研究」では、好きな作家の本を何冊か読むといったプロジェクトに参加して意見を書く、ということが基準とされている。また、大人の指導や支援を受けて、自分の経験を思い出したり、与えられた資料から情報を集めて質問に答えることが求められる。なお、4年生以上では、テキストから根拠を引用することが求められる。

「範囲」について、幼稚園段階では求められないが、3年生以上では調べたり、見直して修正するという事を日常的に行うこと、1日程度で特定の目的や読み手に対して書く事などが求められる。なお、付記Aでは「書く」ことについて「読み手の視点を変えるための議論」「説明的な記述」「物語」「これらの混合」というタイプに分けられている。

### 【話す・聞く】

「理解と協働」では、友達や大人と一緒に、幼稚園についての話題やテキストについて、大小の様々なグループでの会話に参加することが求められる。ここには、他の人の話を聴いたり、順番を守って話すなど、予め決められたルールに沿って議論することや、様々な人と意見を交わして会話を続けることなどが含まれる。また、朗読したテキストや、口頭やメディアで伝えられた情報で分からないことがあれば、質問したり答えたりすることで理解を確認したり、助けを求めたり情報を得るために質問することも基準に設定されている。

「知識や考えの発表」では、促されたり支援されながら、親しい人や場所、物、出来事について説明したり、詳しく説明するために絵など視覚に訴えるものを付け加えること、聞こえるように話し、自分の考えや感じたこと、アイデアをはっきりと表現することが求められる。

### 【言語】

「標準的な英語の慣例」では、書くときや話すときに、標準的な文法や慣用を用いることが求められる。ここには、大文字と小文字、よく用いら

れる名詞や動詞、s/or/es を付け加えて複数形にする、who や what を用いた疑問形を理解する、to や from などよく用いられる前置詞を使う、ということが含まれる。また、標準的な大文字や句読点、綴りで書く事が求められる。「言葉の知識」については、幼稚園段階にはないが、2 年生以上では非公式な英語との比較が基準に加わる。

「語彙の獲得と使用」では、幼稚園での読み物を元に、知らない言葉や複数の意味を持つ言葉や語句を明らかにする。よく知っている言葉の新しい意味を知ったり、言葉の前後につく re-や-ful という文字を手がかりにすることが示される。また、大人からの指導と支援と共に、言葉のつながりや意味合いを探ることが基準となっている。ここには、「形」「食べ物」などと分類したり、反意語として理解したり、実生活と結びつけることなどが含まれる。また、会話や読書を通じて獲得した言葉を使うことが求められている。

ELA の基準について総じて言えば、「励ましと支援を受けながら」という点が特徴的であり、順を追って自立的な読み手になるように細かに支援のポイントが項目化されていた。印刷概念を含む基本的な読解スキルについて明文化されていることも特徴的であり、言語的多様性を背景とすることから標準的な英語の慣例についても項目化されていた。プロジェクトを通じて書く機会を設定する点や、様々な大人を含めたグループでの会話が想定されている点は、日本の保育においても参考になる点がある。

### 3. ニューヨーク市の事例

近年の米国の幼児教育について調査した深堀 (2013) によれば、2009 年より初等・中等教育の参照基準が州の連合体により手がけられており、幼児教育プログラムに下方延長している州は 5 州に過ぎないが、ニューヨーク州はその一つであることから幼児教育の関心が高い州と位置づけられる。ニューヨーク州で 2011 年に発表された「コモンコアに向けたプレ・キンダーガーテン・プログラムの基礎」では、伝統的な教科・科目別の知

識・技能だけでなく、21 世紀型スキルと呼ばれる分野横断的な「考える力」の前提となる基礎・基本の定着が目指されている<sup>6)</sup>。また、2012 年には「ニューヨーク州幼児学習ガイドライン」を作成し、そのガイドラインがヘッドスタート幼児発達・学習枠組みに対応していることを明記した。このようにガイドラインが設定されたことは、これまで多様性が許容された幼児教育サービスにとって大きな変化であった。こうしたニューヨーク州の動きに連動する形で、ニューヨーク市でも「コモンコアに向けたプレ・キンダーガーテン・プログラムの基礎」の導入が進んでおり、市から補助金の支給を受ける施設では、満たすべき基準として参照されている。

筆者が 2012 年 12 月 11 日にニューヨーク市で訪れた小学校では、これから幼稚園や小学校に通う年代の子どもを持つ保護者のために、夕食時に講堂でウェルカムセッションが開かれ、イスラエルを含む様々な国の人たちが集った。以下は、そのときの様子である。

説明担当者から、「では、幼稚園に入る時には、どのようなことができたいと思いますか？」と保護者に聞かけると、「指示によく従うこと？」という答えが返ってきた。

「では、学校に行く準備ができて (School Ready) とは？」という質問には、「じっとできること？」と答えが返ってくる。

次に、コミュニケーションに関する話題となり、「気持ちや考えを伝え合う」「特に、共有するということを重視したいですね。おもちゃとか」「自分の名前を書けるようになってほしい」「ものを数えられるようになってほしい」と保護者から声が挙がる。

保護者とのやり取りを踏まえ、担当者が「このように、私たちはたくさん、こうなってほしいという基準 (bottom-line) を持っています。」「これまでに出てきたことを整理しますと、一つは言語技術に関する領域、もう一つは算数に関する領域と分けられます。」といい、発表されたばかりの「ニュー

「ヨーク州幼児学習ガイドライン」を紹介するスライドを映し説明する。読解の「重要な考えと詳細」に関する基準を示し「何か共通点は分かりますか?」と問いかけ、幼稚園段階までには「促しや支援を伴って」という言葉が見つかるものの、「テキストの詳細について尋ねたり答えたりする」ということについては同じであることに気付かせる。

その後、担当者と保護者の間で「遊びを通じての学び」が幼児期で重要であること、ブロックを使った遊びが創造力を育むことなど、遊びを通じた経験がその後の学びにつながるということが確認された。子どもたちがブロックで遊ぶ姿を映した動画を見ながら、その遊びの中で子どもたちの助け合いや、教師の関わりに着目し、子どもたちの社会性を育むためにどのような環境構成や働きかけが意図されているかが話し合われた。

(2012年12月11日フィールドノート)

このように、この学校での説明では丁寧に保護者と対話を重ねながら、新しく導入されようとする複雑な基準についての理解を求めている。保護者は小学校に入る準備段階として、机に座って話を聞く、という姿をイメージしている様子が伺える。また、保護者は言葉を使って気持ちを伝え合うことや、基本的な識字能力、計算能力を期待しており、担当者は「ニューヨーク州幼児学習ガイドライン」はその期待を整理したものだと位置づけ、説明していた。幼稚園段階の特徴として「促しや支援を伴って」という言葉がついている点は、共通コア州スタンダードと同じである。

ただし、一部はコモンコアと対応する基準であるが、教科学習面だけでなく、その根本的な概念として「遊び」を重視している、ということが強調されていた。その背景には、共通コア州スタンダードが、子どもの「遊び」の時間を削ってしまうことを不安視する保護者の声があったと考えられる。ここから、米国の幼小カリキュラム接続において、「遊び」とのバランスが課題となっていることが読み取れる<sup>7)</sup>。

#### 4. 考察

共通コア州スタンダードは、全米レベルでの統一カリキュラムを設定し、教育水準の向上を図ったこと、幼稚園から高校卒業まで一貫した考えでカリキュラムが考えられている点が評価される一方で、遊びを中心とした発達を重視する幼稚園段階では、系統主義的なカリキュラムを導入することに対して違和感が唱えられていた。

その内容についてみると、算数の基準では、具体的な物を使って自然数で表し比較すること、形や空間を描くことに焦点が当てられていた。幼稚園段階でも簡単な足し算の数式に触れることが推奨されている点の特徴的である。幼稚園段階特有の領域として「数え方と個数」が設定されていた。また、小学校と比べ、「幾何」に関する項目が多く設定され、図形認識について早くから教育していく姿勢が見られた。

ELAの「読解」の基準を見ると、幼稚園段階では大人との豊かでよく考えられた会話に参加すべきとされ、より複雑なテキストを読む準備がなされた。「励ましと支援を受けながら」と前置きされている点が、小学校1年生段階との違いである。また、説明文の読解については、著者と挿絵作者を区別し、挿絵とテキストの関係に着目させる点の特徴的であった。

「書く」については、絵を描くことや口述することとあわせて文章を書くことが求められており、書くこと自体を楽しむことが重視され、好きな作家の本を複数読むプロジェクトに参加して書くことなどが推奨されていた。「話す・聞く」では、友だちや大人と一緒に、大小様々なグループに参加する中で、質問したり答えたりすることが求められていた。「言語」では、幼稚園での読み物や生活と結びつけながら標準的な英語の使用法を学ぶことが求められていた。

ニューヨーク市では、州で設定された「ニューヨーク州幼児学習ガイドライン」に基づき、これをヘッドスタート幼児発達・学習の枠組みに対応しているとみなした上で、補助金支給を受ける幼



児教育サービスを行なう施設の満たすべき基準と位置づけた。ただし、保護者向けの説明会では、「遊びを通じての学び」が幼児期にとって重要であることが学校関係者から繰り返し訴えられ、共通コア州スタンダーズの幼稚園段階の導入に当たって「遊び」の時間が削られる保護者の不安を解消しようとする様子も見られた<sup>8)</sup>。

日本でも、「育みたい資質・能力」として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱と、「健康な心と体」「自立心」など「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿を示すことで、学校段階の接続を図ろうとされている。しかし、保育の内容に「国旗・国歌に親しむ」が盛り込まれたことなどから、「押し付け」と批判する声や、あまりに理想的すぎるという声も聞かれ、これらは到達目標ではなく、自園の中で目標を話し合い、取組みを振り返る際の一つの見方として活用すべきと考える立場も見られる(安家・片山2017、大宮他2017など)。

日米両国とも、幼児教育の重要性が意識されたことから、国家主導で幼稚園段階のカリキュラム策定に乗り出し、これに現場が反発や懸念を抱いていること、実施に当たり幼児教育の専門家を交えて丁寧に継続的な見直しが求められる点は共通している。遊びを中心とした幼稚園と系統主義の小学校の接続期のカリキュラムの問題は、日米ともに共通しているように見える。

ただし、その違いに目を向けると、日本の幼稚園教育要領が様々な領域を横断し、そのねらいや内容が多岐にわたっているのに対し、米国の共通コア州スタンダーズは幼稚園段階から小学校への接続にあたり、項目を揃えて段階的に小学校での学習に導こうとしている点の特徴である。また、その段階を考慮する上で、「促しや支援を伴って」という言葉に表れているように、保育者や教師などの大人がどのように関わり、自立に導くかという点が意識されている点は、日本の幼稚園教育要領と小学校の学習指導要領の間にある隔たりを埋めるためのアプローチ・カリキュラムを考える上で活かせる視点である。

本稿では、コモンコアの幼稚園段階の内容について、日本の幼稚園教育要領との比較を視野に入れて検討してきたが、今後の課題としてK-8の一貫カリキュラム全体の中で、「遊び」を中心とした幼稚園段階のカリキュラムや単元がどのように位置づいているのかの事例研究が必要であろう。

謝辞：本研究は科研費「学力格差是正政策の国際比較(研究課題番号23243084:代表 志水宏吉)」の助成を受けたものである。

#### 注

- 1) 子どもたちが「テスト」と書かれた装置を頭につけ、競走馬につける遮眼帯(プリンカー)をつけて机に向う戯画はしばしば記事に引用される(David Horsey, Thursday, October 7, 2010)。幼児期に読書を強いることはメリットが少ないことを示す記事としては、Defending the Early Years(Jan13, 2014), Reading Instruction in Kindergarten: Little to Gain and Much to Lose, Retrieved May 7, 2018, from <https://www.deyproject.org/dey-archives/our-new-report-reading-instruction-in-kindergarten-little-to-gain-and-much-to-lose>、がある。
- 2) Washington Post(May 2, 2014), 6 reasons to reject Common Core K-3 standards- and 6 rules to guide policy, Valerie Strauss, Retrieved May 7, 2018, from <https://www.washingtonpost.com/news/answer-sheet/wp/2014/05/02/6-reasons-to-reject-common-core-k-3-standards-and-6-axioms-to-guide-policy/>
- 3) Thomas B. Fordham Institute( Feb11, 2015), Is Common Core too hard for kindergarten?, Robert Pondiscio, Retrieved May 7, 2018, from <https://edexcellence.net/articles/is-common-core-too-hard-for-kindergarten>
- 4) Naeyc, The Common Core State Standards: Caution and Opportunity for Early Childhood Education, 2012, Retrieved May 7, 2018, from <https://www.naeyc.org/resources/topics/common-core/statements>
- 5) AD590Lと判定されている。AD(Adult Directed)は「大人が読む」ことを示すコードである。2-3

- 年生で推奨される Lexile スコアが 450 から 790 であることを踏まえれば、幼稚園段階としては高度なテキストである。Lexile スコアを判定するサイトでも、話の構造や文中で用いられる構文は、読書を始めたばかりの子どもたちにとっては最高レベルで難しいとされている。 Retrieved May 7, 2018, from <https://fab.lexile.com/book/details/9780689712012/>
- 6) 「学習準備」「からだの発達と健康」「社会情動的発達」「コミュニケーション、言語、リテラシー」「世界を知る (数学、科学、社会、芸術、技術)」の 5 領域からなり、一部は幼稚園段階のコモンコアと対応している。
  - 7) New York Times (Feb16, 2014), Common Core Curriculum Now Has Critics on the left, Al Baker, Retrieved May 7, 2018, from <https://www.nytimes.com/2014/02/17/nyregion/new-york-early-champion-of-common-core-standards-joins-critics.html>
  - 8) その後、ニューヨーク州ではコモンコアに対する反対の声が大きくなり、民主党であるクオモ (A. M. Cuomo) 知事も批判に回っている。2017 年のエデュケーション・ウィークの記事では、コモンコアから脱却して新たな基準を作る動きがあることが紹介されている。早期教育では、遊びを中心とするアプローチが押し出されているが、「発達的に適切な」11 項目が数ページに少し紹介されるにとどまっている。 Education Week (Sep15, 2017), New York Has Rewritten the Common Core, Here's What You Need to Know, Stephen Sawchuk, Retrieved May 7, 2018, [http://blogs.edweek.org/edweek/curriculum/2017/09/NY\\_replaces\\_common\\_core\\_here\\_are\\_the\\_details.html](http://blogs.edweek.org/edweek/curriculum/2017/09/NY_replaces_common_core_here_are_the_details.html)
  - 3) 安家周一・片山喜章『新幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領がわかる本』ひかりのくに、2017 年
  - 4) 青山之典「Common Core State Standards for English Language Arts における Reading Standards for Informational Text (K・12): スパイラル構造をもった説明的文章読解カリキュラムの実際」『国語教育思想研究 (7)』、pp. 1-13、2013 年
  - 5) 大宮勇雄・川田学・近藤幹生・島本一男編『どう変わる?何が課題?現場の視点で新要領・指針を考えよう』ひとなる書房、2017 年
  - 6) 佐々木大和「米国における州共通コアスタンダード (Common Core State Standards) 国語の検討: 系統的な連続性に基づく幼稚園学年 (Grade K) のスタンダードという視点から」『教育学研究紀要 62(2)』、pp. 572-577、2016 年
  - 7) 新谷龍太郎「共通コア州スタンダードの開発プロセス及び内容ー中学校学習指導要領との比較を踏まえて」『アメリカ教育学会紀要 (25)』、pp. 15-27 2014 年
  - 8) 深堀聡子「米国の幼児教育施設の教育内容および評価の現状や動向に関する調査研究ー自助の枠組みのなかでの質保証とセーフティー・ネットー」上智大学『諸外国の幼児教育施設の教育内容・評価の現状や動向に関する調査および幼児教育の質保証に関する国際比較研究』、p.33-51、2013 年
  - 9) 堀江祐爾「アメリカ合衆国における「説明文のための読むことのスタンダード」に関する考察: 理由や根拠によって支えられているかの吟味」『兵庫教育大学研究紀要 49』、pp. 25-31、2016 年
  - 10) ラルフ・フレッチャー、ジョアン・ポータルビ著、小坂 敦子・吉田 新一郎訳『ライティング・ワーク ショップー「書く」ことが好きになる教え方・学び方』新評論、2007 年

#### 引用・参考文献

- 1) Susan W. Cress & Daniel T. Holm (2017). Demystifying the Common Core in Kindergarten Writing. *Journal of Education and Learning*; Vol. 6, No. 4, 92-99.
- 2) Yenny Otálora (2016). Are the K-2 Common Core State Standards for Mathematics Developmentally Appropriate?, *The Mathematics Educator* Vol. 25, Special Issue, 3-28